

共存

谷山千茂枝

自由で束縛がない毎日をごせる時代に改めて感謝し、このままでも願う。流行などの貪欲も世の中の移り変わりと共にチェンジし、そんなに続行しない方だ。

父母の成長の段階としての大切な時期の頃は、戦争中で物資や食物が不足した上、配給制度となる。学問も中断して学徒動員の強制化、自由な意思の疎通もままならず、児童の尊重は通じる事も少ない。国内過酷で苦しく自粛の時代の中で家族と過ごした思い出話を熱く語る父母の顔が逆に辛く、悲しくもある。

私は戦後に生まれたため、モンペ姿の母ではなく、脳裏に浮かぶのは晩年の姿の優しく笑う姿である。

新しい団地に住む私が小学生の低学年の頃、カレーライスの夕食の時、額の汗を拭う両親の姿をチラッと見て、嬉しさと安心のまま溜め息して笑う。

「我が家のライスカレーは格別にウマイね」

父の褒め言葉に無表情で頷く私に、母は嬉しく微笑む。私が大人のスプーンを不器用に握り、フーフーして食べ終え完食すると、皆で喜んだ。お茶を飲んだら咳をする私の無邪気さが残る家族団欒の思い出の一コマである。

現在の日々の生活の中で食材の買い出しのあらましとして、近所のスーパーで殆ど揃うのは有難く、あまり困らない。主婦の役目として、家族の安全性や賞味期限に対しての心配りも必要かと思う以上、実践する。

今や、店頭に並ぶ季節の野菜や果物などの種類の豊富さと色とりどりの鮮やかさに目移りがちでも、嬉しい嘆きと解釈している。夜中でも徒歩で直ぐにあるコンビニエンスストアで購入可能と思うだけで、精神的にもよくて助かる。別に治安が悪いとかは聞いていない。私は、生きるために栄養を考えたり、バランスも研究し、食している。夜は安らぎに眠るとスッキリ目覚め、健康維持が保たれ、頑張れる。明日の不安や心配、虞れも別になく、普通に生活している。それらに関して、自問して見た。

共存
たとえば、突然にジャングルの中で遭難したらパニックしかない。そういう意識の中、獣の姿の想像にビビるのはたしかで、まず隠れる。沈黙と焦りで身動き出来ないとな誰かに伝えるため、スマートフォンを出す。でも圏外で繋がらない。エネルギー消費を考えなければと、水分補給につたが効果的なので、周辺で捜すことにする。

漸く、見つけて割って飲む。この先、やはり、命が欲しくなる。私の唯一の手段としては、戦うより防御だ。木登りにチャレンジして見たが、手が痛く進むことが出来ず、無理で諦めることにした。悔しく醜態の連発で不安に陥る。それでも、誰かを求めるのは、やはり無力の証拠である。気を取り直して、果実のマンゴーやパイヤの木を捜す気になって来て、いざ木によじ登り出した途端、「イタイ」と、手を擦り剥いてしまい、七転び八起きなんて無理で中止する。

やり切れなくその辺りの地べたに座っている時、小さな虫を発見した。だんだんと愛着を感じながら、ゆっくり掴んで離しての単純な遊びが面白く楽しめた。私は、もう一人ぼっちの孤独感も消滅していた。それも束の間で、全体的に怠くて身体の変化に気付く。

もう限界だと苛立つし、嫌気が差して涙が溢れ嘔る。そんな中、木で移動中の猿の集団の姿を目の当たりにして、一人喜ぶ。追うことは至難の技だと判明し、途方に暮れる。

私の最期は承知の上でも、悲しみは自暴自棄になる。心の中で落ち着けと叫ぶ。

パウロの切なる祈りに、「私にとっては、生きることはキリスト、死ぬことも益です」と、ある。死ぬことも意味があると思う。

手の傷に菌が入り感染症による痙攣で惨めで情けなく、一貫の終わりとなる。土をいじる場合の破傷風の感染症が発生などと、後の祭りだ。

ここのジャングルでは、生きる業を持たない私にとって、酷な話で哀れなもの。紙幣などは何の価値があるのか。それよりも、一リットルの水が欲しい。必ず、持参したいアイテムだった。

家族との生活が大切であり、生かされる命に対して、改めて深さを感じる。

私たち家族四人の全員参加で、年に二回ほど一泊二日の距離は別として、旅行に出掛ける。夕食が楽しみで、バイキングを好む。

平成二十九年の暮れの寒い日の午後、県内の蒲郡に赴く。特にフランス料理のフルコースが楽しみである。この旅行では、私にとっては色々と考えさせられた旅行となった。

海辺に建つ温泉付きの老舗のホテルには、割とスムーズに到着した。主人の車から降りて見たら、強風で寒くて億劫になる。それでも家族旅行は嬉しいもので、食事が楽しみだ。

海岸付近でざわざわするのに注目し、沢山の鴉の群れにつられて、迅速に歩み寄る私たち四人。観光客がエサをやる姿に鴉や以外の鳥も嬉しそう。鴉たちが一斉に白い羽を広げて羽ばたき水しぶきを上げた後、遠くの青い空へと舞い上がるのが羨ましいと思う。その姿がスマートで美しく、生き生きとして一面に臨場感あふれる。鴉は人々を笑顔にさせる。

観光客を後に、私たちはこの先の橋を渡ることにした。

竹島橋は三百八十七メートルと長い橋で、縁結びへ通じる道と呼ばれている。師走の暮れでも人が多く、ファミリーも目立つ。往復するには長距離と言え、途中で海を眺め

るアベックも多い。対のミニスカートの女性に追い越されて、目立つ彼女を目印に急ぐことにした。

竹島橋の真中付近で一羽の鷓鴣が、なぜか私の頭上でバタバタさせて見ている。人懐っこい性格に興味を示す私が手を振る。鷓鴣の顔が笑っている様に見えて和む。鷓鴣が去り、家族が気になって、家族が待つ海岸まで、元気を取り戻して足早に急ぐ。

夕食のフランス料理は遥かに美味しくて見るだけでも、楽しくなる。その時、脳裏に一羽の鷓鴣が気になってしまい、窓を見ていたら贅沢の文字が浮かんで来た。

鷓鴣は雑食性で水面の魚や地上の食物を探し回る。それらを考えると、心から人間に生まれて良かったと思う。

毎日の食事をする上で、バランスよく栄養を摂取する。毎日、レシピにより、炒めたり、焼いたりなどして、工夫して楽しむ。

まだ十代の頃の私が、母に質問した事があった。

将来、私の稼ぎで何が食べられるのかと聞いて見た。

「ちいちゃんの給料で買う食物だったら、お父さんとお母さんは美味しいと満足」

少しプレッシャーでも、両親を少しでも喜ばせる目標が出来たと思う昔が懐かしい。食物を無駄にしない料理方法を工夫し、家族が満足するように努力を怠らないことが大切だと思う。

自然がある以上は、動物は生きられる。私は、この国で家族と共に生きられたら嬉しいと思う。